WASON
HQ
Feb. 1894
no. 368

明治十八年初刊

女學雜誌

每週土曜日發兌

第三百六十八號

要目

大磯浦(韻文) 故新島先生を憶ひて　雲峯子

吁瘋癲者 感慨無限の結文をもて　よし治

白河樂翁女訓 試みに一々評解して　無名子

島津内室の述懷 一名、女武勇の辨　默翁

○ 男山にて女郎花を見て 白衣皓々、姿天使の如し

歌學枝折 讀むべき書名一々擧て　鈴木弘恭

明治二十七年二月二十四日發兌

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百六十八號目録

社説

吁、彼の瘋癲者（下）

幾分のなぐさめ

到る處ろ吾國あり吾同胞あり

危機到るまで

南北戰爭

安息永眠

感慨限りなし

つれづれ草

大磯浦（韻文）　磯貝雲峯

故新島先生を懐ひて

家政

小兒に話しする好時間（けい子）

冬の襯衣

笑話二つ（ふみ子）

似而非〇貴賤無差別

文しらべ

白河樂翁公の婦女訓（上）　無名子

文藝

歌學枝折　鈴木弘恭

兒藍

老ひたる象のはなし（しづ子）

男山にて女郎花を見て

史傳

島津淡路守内室の述懐（默翁）

一名、女武勇の辨

交詢

孤兒院救助の方案（水戸、高階生）

同じく一新法

逸事

白衣皓々、天使の如し

書架

人生哲學（しづか）

片々

女學視察

青年の女子教育論討議

相川かつ子女史

時報

長崎五島の女子教育篤志家

小學校裁縫科教授法

福岡の結婚例

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治二十七年二月廿四日發兌

第三百六十八號

社説

吁、彼の瘋癲者（下）

ドロセア、リンデ、ザックス女史の言行錄を讀む

（八）幾分のなぐさめ

上下兩院四百餘名の議員を合手にしての戰ひには、數度の敗軍を物ともせず、單騎ますく進擊して、みごと花々しき凱歌を奏するまでに至りしが、哀しい哉、たゞ一個一人の獨斷にて、百事すべて空となりぬ。

此時更に盛かえすべき氣力の無かりしにはあるまじけれど、一身疾ひを歷して九年間の激戰に、五躰の生氣ほとんど枯れ、此わずかに玉の緒を繼いで復たび之を張らんと容易からず、此上は脆く斷絕するともやあらんとて、人々の勸めもだしがたく、暫らく熱想を冷放して、心を海外悠優の遊に轉ぜんとて、一千八百五十四年の九月、病痾にやつれし五十一才の命をまもり、滊船アクチック號に搭じて、大英國リバプールの港に向つて遠遊せり。

たとい百八の重傷を負ふとも、潔よく戰場に屍を暴さんは本望ながら、敵を後ろにして心にもなき閑日月を弄せんと、忍びがたきものなり。留別の宴、別に遺恨の涙あり、空しく巨想を斂めて、暫らく小さき船室に身を托せんとて、波止塲を送る細波に名殘を印して、心さびしくアクチック號に登れば、夙に最良の客室二つを取置れ、万事のもてなし王侯にも優れり。もとより船賃は一錢も請取られず、他の何ものにても所用のまゝ命じ玉へと告げらる。女史はあやしみて、此は何ゆえの特待ぞと不審せしに、船長コリンス氏出で來りて、答へ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て曰く、

あゝ、ヂックス女史、我國民が御身に負ふ所ろ多し、今ま戰ひに無名の勝利を得て、暫し外國に休養し玉はんとするとき、我國民は、何如にして御身の勞をねぎらわんや、僕は滿腔の情を以て感謝す、今ま國民が感謝の辭を代表せしめて、こゝに少さか乍ら報勞の念ひをあらわすとを得るを。願ふらくは、心置なく万事の御用を命じ玉へと。

あゝ、ヂックス女史、滿眼の涙、拭へども盡きず。後日、女史が、歸國せしのちも、亦、大英國、その他歐洲大陸の諸國を巡行するときも、所々の鐵道會社は、無賃の自由旅行劵を寄附し、博愛大慈の人に對する世人の感謝を代表せしめたり。多感の人、女史たるもの、盡し、之によりて幾分の慰さめを得、又しづかに默謝して、いよ〳〵身を邦家に獻げんとの念ひに切まりしとなるべし。

（九）　到る所に、吾國あり吾同胞あり

病ひを養なわんとて國外に遊びたれど、國外の人も亦た同胞の人なれば、病痾に輕快を覺ゆるにつれて、其の災わひを傍觀し、單に己が療養にのみ悠々たると能わず。例の如く、到る處ろ、瘋癲者の慘況を取調べて世人に訴たへ、機會あれば、富人を促がして瘋癲院設立に盡力せしめ、歐洲各國の巡歴中、足跡と共に慈善救濟の赤誠を印せざる地はあらざりき。中には、伊太利の國羅馬に於ては、法王パイアス九世に面謁して國內瘋癲院の不取締を申せしに、法王は數日を出でず、隱かに院を見舞ひて一々實況を視察し、直ちに其改良法に力る盡されたり。王の王たる法王に對してすら之を感動せしむるとの速やかなる如此し。他の帝王又は有權者に面して勸告したる趣き容ほ推察すべし。斯て、スコットランドより巡々に歷行し、遂に極東ロシアに到り、一千八百五十六年の九月、旅にあると全二ヶ年にして、恙なく故國紐育港に歸着したり。

（十）　危機到るまで

遊子、故鄕を想ひ、旅天、自國を望む。遠征は、即はち愛國心の養成なり。況んや、女史が熱烈の精神を以てす、歸國の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

後は、二た年、歷へに押へたる前志を揚發して、驚ろくべき熱意を寄附法案の實行に注がんとせしは明らかなれど、此時奴隷解放の一案、合衆聯邦の結合を二つに割り、南北横さまに裂けて、共和の天下は、名に負はぬ兩敵國を現せんとし、危氣漸やく迫り、實行甚はだ急なりしかば、上下二院をして合同一致せしむべき大法案の通過は、極めて望なしとは見えたり。女史の慧眼は、さとくも之を看破し、大事の來る遠かるまじきが、暫しなりとも、天職を盡さんとて、州々別途の運動に着手し、二年間途絶えたる途をたどり、人の熱心の緒をさぐり、再たび火をもやして各地に一つ／＼の炎をあげしめんとはなしぬ。

よりて、アストル。バンダービルト。ゼーゴールドなど云ふ巨富の人に就きて、個人的の寄附金を促がし、各州の瘋癲院を改良せしめ、新たにランネッシー州のノックスビルに一院を起し、ペンシルバニア州にては、州の議會をして十万弗寄附の案を可決せしめ、南カロリナにては、五千弗の修繕費、一万弗の返濟金、六万弗の維持費、八万弗の擴張費、合計十五万五千弗の寄附案を可決せしめたり。

(十一) 南北戰爭

かゝりける間だに、危機既に到來し、一千八百六十一年、即はち、女史歸國の後ち滿四年半にして、所謂る南北戰爭の第一砲、轟ろき渡れり。

女史、時に五十八歲。國家危急の大機に際しては、老を忘れ、靜を忘れ、本來の英質、皮膚を破ぶつて徹露し、有爲奉公の氣象勃如抑へがたし、電速、策を決して北軍の知事に獻ずる所ろあり。亦た、四月二十日と云ふ、民國未だ銃聲を聞かす、軍兵未だ隊を整へざる頃ろ、女史は、すでに身を挺して、看護婦たらんことを申出でたり。

北軍の陸軍卿エドウインスタントンは、女傑を知れり。直ちに女史を擧げて、看護婦總取締となしぬ。之より北軍幾百の看護人は、皆な女史の指圖を蒙むりぬ。

戰時は、平時と異なる。人も亦た然り。女史も亦た然り。況んや、本來激烈の人、たゞ修養によりて温化薰練せしもの、此の非常の時に當りては、氣焰を吐かずして止まんや。朝より夕べまで、夕べより夜まで、夜より曉に徹するまで、勤

勞刻苦、想像の外なり。自から持する斯の如くなれば、人に要むるも亦如此く、嚴勵武斷、些さかも容さず、苟くも假さず。看病軍中、叱咤の聲は、太砲とゞろき戰馬嘶くの界に劣ることなかりき。

左れば、氣力懶怠の仲間に取りては、女史こそ苦痛の種まきなれ。之に對する不平の聲は騷がしかりしが、陸軍卿スタントン固く信じて疑わず、之に全權を托して思ふまゝに切廻わすことを許せしかば、女史は則はち在ん限りの精魂をつくしたり。

南北戰爭、遂に休み、國內目出度一和せしとき、「看病婦總取締たるカゼリン、リンデ、チックス女史が功勳なみ〳〵ならず、そも何如なるものを用ひて其績しを賞めんや」と、評議まち〳〵なり。陸軍卿、則はち、金俸莫大を之に與へんとせしに、女史は一錢も受けず、聞かるるまゝに所望を吐ひて、國旗二流を要めたり。砲丸、銃劍裂き、鮮血のうらに尚ほ生々しき戰場第一の旗二流を所望したり。陸軍卿は快ちよく諾し、懇ろなる感謝狀を添て、彼の旗二すじを贈る。此旗二流れ、今ま何如ん。ハーバード大學內、此戰ひに討死せしハーバードが子息の紀念室に、翩翻として現在ひるがへる所のもの即はち是也。蓋し、女史が拜受の後ち直ちに寄附せしによる。

（十二）安息永眠

女史が晚年は、南北戰爭戰死者の爲に大紀念碑を建たると、例によりて各所の瘋癲院を改良し、補助し、刺激したるとにて、八十歲に至るまでかくして、閑怠することなかりき。八十才に至りてより、天此の好勞の忠婢に安息を命じ、殘生を最と平らかに送らしめんとや、最早や四方に奔走しがたき身の上となりしかば、敢て靜養閑退の御許しを領し、州の決議の厚遇をうけ自から生みたる天下三十四の瘋癲院のうち、其の第一子と目されたるニウゼルシー州、トレントン瘋癲院の一室を最と快ちよく美くしく備えられたる方に、靜臥安息したり。

爾後六年の生命は、天使の生涯なりき。公平無私、温容淑々、迫らず、強ひず、くぢけず、怠らず、正しく基督信徒晚年のつとめを守りて、最と靜かに終末の召きを待てり。

一千八百八十七年(明治廿年)七月十七日、ヂックス女史は、平らかに永眠せり。ボストン府に近き、モウント、ヲウバン、セメトリーに葬むる。力ある變化多き美くしき一女傑の妙なる生涯、斯の如くして了りぬ。

(十三) 感慨限りなし

われ、ヂックス女史言行錄を讀みて、感ずる所ろ多し。見よ、瘋癲者は、如何なる病者ぞ。多くは、忠實にして謹直なる、熱心にして責任を負ふ、極めて正直なる人の病にあらずや。其人の良心するごとく、其自から省みると切なるによりて、多くは狂氣す。狂氣は即はち眞實熱烈の變態にあらずや。冷眼人事を見ず、痛心人の愛思を念はんものは、當に此病者に熱き同情を表すべき筈にあらずや。

況んや、瘋癲者取締條例未だ完備せず。健人を檻禁して、反つて狂者を製造するものなきにあらず。富百万の公子、涙を鐵窓の下にのみ、死して尚ほ遺恨をはらしがたきとも亦なきにあらず。

狂者、はたして眞の狂か。左れど、之を醫やしがたきにあらず。水は低きに導びく可く、熱思は偏する所ろに弛むべし。もし夫れ按摩が肩のコリをほどき、佳人が痛める人の胸の癪を解かんが如く、精かに狂者狂する所の由緣を察して、其の鬱僻せる方に同情を寄せ、而して溢るゝ斗りの愛思を以て其偏倚せる思想を引返さんには、狂者を醫やすの事、必らずしも難からず。尋常の看病は、生理によると多けれど、狂者の看護は、專ぱら心理による。愛情切ならんものは、直ちに其看護婦となるとを得べし。

吁、瘋癲者何ものぞ。其鐵鎖につながれて夜哮號し、白晝鬼を夢みて天地に懼れ、愛子を抱きて之を識らず、愛妻と語りて敵となし、啞然として笑ひ、愁然として泣き、衣服を裂きて恥を暴らし、醜汚を崇むつて大言壯語する狀態をながめんもの、たとひ其父子昆弟にあらず、其妻女姉妹にあらざるものと云へども、誰か顏を覆ひて哀れに泣かざるものやある。嘗て、彼等が大瀧の水亂下する下につき込まれ、護摩の煙、氣を窒する內に困倒する狀を見てより、われは狂者の慘狀を忘るゝと能はず。狂人何の狂ぞ、狂人を逆遇するもの、何の智ぞ。天地、何んぞ狂者をつくる、世人、何ぞ狂者を棄ると

歎じ、痛心隱々拂へども去りがたし。

茲に、ヂックス女史が言行錄を敍して、世上深愛の婦人諸君に申す。看病は、女子の天職なり、而して、瘋癲者の看病は、更に多く女子に適す。況んや、女性の狂者は、其の裸躰醜狀を、同性の人の外、何ものにも見せしむべからず。深く同情を此等の事由に寄せなんもの、彼のヂックス女史と志を共にして、此の仁ける事業に身を獻ぜよ。吁、かの瘋癲者、尤とも痛むべし、之を救はんもの、果して誰ぞや。

◎貴人の妻を北の方とも云ふ、北の政所とも云ふ。そは、男は陽にして、女は陰、南は陽にして北は陰、表は陽にして、奥は陰なるゆへに由る。これ、女は奥に引こもり居て、内所の諸事を取計らふゆへ、北の方とも、又北の政所とも云ふ。而して政所は諸事を取計らふ役所の意味なり。（貞丈雜記）

◎下﨟の女房の事、鎌倉年中行事に云く、上﨟は御一族の娘、中﨟は奉公の娘、下﨟は御中居、殿原の娘なり

つれづれ草

大磯浦

磯貝雲峯

故、新島先生を懷ひて、

一

くだくるなみの　おとたかく
　いまもいそべに　きこゆなり、
まつふくかぜの　こゑすごく、
　なほもはやしに　のこるなり。
かへらぬりのは　むかしにて、
　さはぐなみかぜ　いくばくの、
ひとのうらみを　そふるらん。
　ひとのうらみを　そふるらん。

二

伊豆のうなばら　おほしまの、
　おきまでつゞく　眞帆かた帆、
つらなるふねを　うちながめ、

くもにそびゆる　ふじのねの、
雪のひかりを　あふぎみて、
こゝろをたまと　みがきけん、
ひとのゆくゑは　いづこかも。
ひとのゆくゑは　いづこかも。

三

大磯うらに　こぎいでゝ、
なみのうき世を　わたるてふ
すなどるしづの　そがなかに、
すぎこしかたを　かたるべき、
ひともありとぞ　いざともよ、
まことむかしの　こひしくば、
いざことゝへよ　なみかぜに。
いざことゝへよ　なみかぜに。

四

しづかにきけば　ふなびとは、
かくはいらへん　汝がために。
「身はいたつきに　なやみても、
こゝろはたけき　ものゝふの、
むかしを見する　そのすがた、
やつれはてにし　さまなれど、
ふかきよろこび　あらはれて、
ふかきよろこび　あらはれて、

五

「ふじのねよりも　たかしてふ、
のぞみはよそに　見えてけり。
されどうれひに　しづむさま、
世をいかばかり　なげきけん。
たみをすくはん　ちからなしと、
いたくなげきし　ことのはも、
いまもくにびと　わすれじな、
いまもくにびと　わすれじな、

六

「杖をちからに　おりたちて、
あゆめるさまの　ちからなさ。
はるかにおきを　うちながめ

たかくふじのね　うちあふぎ、
ひとりこゝろを　なぐさめけん、
こぎいてし日毎に　そのすがた、
いそべわたりに　見えにけり。
いそべわたりに　見えにけり。

七

「おほぞらくらく　かきくもり、
あられまじりの　むらしぐれ
そゝぐばかりに　ふりいでつ。
いはにくだくる　おきつなみ、
ふじよりおろす　やまおろし、
なるかみのごと　なりひゞき、
あめつちまでも　うごきけり。
あめつちまでも　うごきけり。

八

こゝろなしてふ　くさも木も、
なみだのあめに　うちしほれ、
あらしにまよふ　とりがねも
いとゞあはれに　きこゑけり。
おにがみまでも　なげきけん、
かくもあはれに　すぎし日は、
いかなる日にて　ありけらし、
いかなる日にて　ありけらし。

九

東雲のそら　あけそめて、
しぐれのくも　はれ渡り、
なみもあらしも　しづまりぬ、
あさひのひかり　さしそひて、
おほうなばらは　ますかゞみ、
かげさやかにも　てりわたり、
うつるはみ代の　さかえにて、
うつるはみ代の　さかえにて。

十

ちはやふるてふ　かみよより、
みがきあげゝん　玉にして、
ち代にかはらぬ　ふじのねの、

ゆきの光は　すみ渡り、
うらわづたひに　なみたてる、
まつのみどりは　きよくして、
かはらぬ色を　見せながら、
かはらぬいろを　見せながら、

十一　よべのあらしに　くだけにし、
ふねのかず〱　よるなみに、
うちよせられし　おほいその、
うらのけしきは　さすがにも、
きのふのさまを　見すれども、
いそに見なれし　おもかげの、
見えぬ日とこそ　なりにけれ。
見えぬ日とこそ　なりにけれ。

十二　みぎはにうかぶ　しまつとり、
いつのあらしを　ゆめむらん。
まつの梢に　なくからす、
たゞ身の上を　つぐるらん。
あまのふせやに　たつけぶり、
風にまかせて　ゆくすゑは、
いづこのそらに　きゆるらん。
いづこのそらに　きゆるらん。

十三　うきにひかりを　さしのこし、
かたぶきそめし　夕つく日、
くれ行そらに　ほし見えて、
なみまにきえし　おきつしま、
ふたつみつよつ　こぎつれて、
いへぢをいそぐ　あまをぶね、
あたりさびしく　くれそめつ、
あたりさびしく　くれそめつ。

十四　われもなぎさに　ふねうけて、
ふせやにかへる　みちすがら、
ちからなげなる　ひと〱が、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

おくるひつぎを　をぐるまに、
なみだとともに　かきのせて、
ひとすぢけぶり　のこしおき、
いにけんそらは　いづこかも、
いにけんそらは　いづこかも。

十五
その夜ふかき　こがらしの、
おとのたえまに　さやかにも、
われにかたりし　そのこわね、
きしによるなみ　さよあらし、
ひゞくおり〳〵　わかむれに、
むかしながらに　きこゆれば、
さてかたらまし　そのことば、
さてかたらまし　そのことば。

十六
なみのうへに　はかなくも、
消えにしあわと　見えけるは、
ひかりもきよき　玉にして、　玉にして
さやかなる　そがひかり、
とこしへまでも　かゞやきて、
やみぢのしるべと　なりぬべし。
くだけにし　そのひゞき、
ち代よろづ代も　さやかにて、
ねぶれる世をや　さますらん、
ねぶれる世をや　さますらん。
むば玉のやみよのそらをてらさんと
くだけはてけん玉はこのたま、

十七
あだなみの　うちよする、
すごきひゞきと　きゝつるは、
松のあらしと　ふきかはり、　ふきかはり
さやかなり　そがおとは、
千代のさかえを　あらはして、
みやこのそらに　ひゞくなり、
雨風の　あらかりし、
をぐらきそらは　はれ渡り、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

きよきひかりと　なりにけり、
　きよきひかりと　なりにけり。
雨あらしさはぎしそらにさしかへて、
　匂ふ光のきよくもあるかな、

十八　うつせみの　からの身は
　はかなきつゆと　おくつきの
くさばのもとに　消えぬべし、　消えぬべし。
　まごゝろは　千代までも
さかえんまつと　もろともに、
　ながくこの世に　のこるべし。
地の上に　おちざれば
　みをもむすばて　ひとつぶの
むぎはむかしの　まゝなるを、
　むぎはむかしの　まゝなるを、
おくつきの露と消えしと誰かいふ
　松におとらぬ君がさかえを、

家政

○小兒に話する好時間　けい子

三尺に足らぬ、輕く柔らかなる躰軀、時計の針の止みまなきが如く、チヨコ／＼と動き廻りて、小休みなきは、幼兒の常ぞかし、それもそのはづ、四時それぞれに、面目を改め、珍かに、美くしき、幼兒の周圍をかこむ、事々物々は、彼れの豊なる好奇心をして、迎接するに暇なからしむ、アレ見られよ、彼の愛らしき、短かく肥えたる足が、思束なくも、右方左方にはこばるゝを、かゝる多忙しき時に當り、彼れを呼びとめ、語り出でんこと、いと難く、かゝる折は、いかに面白き話も、いかに樂しき昔語も、彼れの愛らしき小耳を傾むけしむるに足らず、されば問ふ、幼兒に談話するに、最適當なる時節はいつぞ、二六時中いづれの時ぞ、夕日かげ西山に沒し、幼心を動かす四方の美くしく、樂しき景色は、ほの暗く淋しき空氣の中に、かくれ去り、心初めて靜まり、父母の

慈愛心より反射しきたる、樂しき話、きかまほしとて、ヨチ母樣、ノウ父樣と乞ひ求むる時こそ、最も好時期なれ、世の父母たる人々よ、かゝる機會を外さず、德義の種子を、童子の心に蒔き下されよ、智慧の芽を彼れの心に、植附け玉へよ

○冬の襯衣

冬の襯衣の最も良き地は何にぞ、云ふまでもなしフラ子ルなり、何故によきぞ、其質粗にして身躰より蒸發する汚氣を、よく吸收するなり、其質不導体にして、よく躰温を保ちて外部に漏るゝを防ぎ更に、外寒の肌を襲ふを禦ぐが故なり、其色は何にがよきぞ、勿論白色なり、白色は内温を保ち、併て明らかに汚目を、顯すを以てなり、夏は汗臭きを恐れ、又新らしき洗濯着物の着心地よきにひかされ、誰人も之れも鳥渡一洗濯、之れも序にふり出してと、心も軽き夏浴衣、汗染おときはなきものなり、されど此頃の如く、盥の水は指手を刺し、干竿に懸けし濕衣は、氷りて肩衣の如く硬る時節には、知らず／＼洗濯を怠り、背縫の山に雲の如く霞の如き黒き痕を、兎角止め易きものなれば、此際殊に一言告げ申すになむ、襯衣は皮膚の分泌物を吸ひとり、皮膚につかむとする浮塵を攝り、皮膚を乾かして不潔物の溜るを防ぐ、かゝる必要物が汚垢、皮膚の屑片、陳腐の皮脂、汗を以て滿たされ、其効能否々作用を欠きなば、衞生上いかに不都合のことなるや、そは申さずとも皆能く知り玉ふことならむ、故に冬と雖とも襯衣を吾等に代りて時々沐浴せしめよと云ふ、金言を忘れ玉はぬことを望むなり、

○笑話　　ふみ子

◎似而非　或家の奥樣人に向つて語りけるには、私しはほんとに妙ですよ。經濟と不經濟と二ツの性質を兼てるんでしやうよ。何だつて自分のものを買ふ時には少しも金額を厭ひませんが、人には滅多に何一ツやりませんもの。ほんとに不經濟家のやうな經濟家ですね。

◎衣服無差別　山だしの下女始めて女帯結に髪を結せ呆れたる顔付にて、チヤ／＼奥樣も三錢だのに、私しでも三錢ですか。

文しらべ

白河樂翁公の婦女訓（上）

無名子

近時少閑を得て、白河樂翁公の遺著を繙く、これ余が少時より愛讀する所のものなり。公が政治家として、文學者として、又經濟家として、寧ろ德川時代の一大偉人として、敬慕すべき人物なることは、疾く世人の認め識る所なり。苟も彼の時代の政治、經濟を論究せんとする徒は、公の所見の卓越し、事跡の重大なることを、瞬時も忘却すべからず。

左に記する所のものは單に公が婦女に關する訓戒の一斑なり想ふに彼の時代にありては談偶婦人に涉るあれば、これをもて多くは猥りがましき事と思惟し、婦人に馴れ染むは皆な遊冶郎の業として擯斥し、夫婦の間柄も、相愛といはんよりは極めて嚴正なりしとぞいはめ、故に婦人に對しては、公けの教育制度も成立たざりき。試みに彼の時代の學者、政治家の遺著を繙くに、已が妻女に關り、若くは一般の婦人に對する事項を記せるものいと少なし。啻に徂徠、白石等のみにはあらざりけり。是れ偏に時勢の影響の然らしむる所なり。然るに樂翁公が、未だ妙齡の青年にして、その新婚後、夫人の爲めにものせし、難波江を繙かば、渠が公私共に、周到緻密の觀念をもち、從て偉人たるの資格を具へられたるを、見るに足らん。

德川時代の文敎は、種々の學派に分れたりと雖ども、之を一括すれば、支那の思想に外ならざるを知るべし。而して正統的にして、而かも世上勢力あるものは、孔孟の敎理なりき。幕府の重役にあるもの、學事上の大權を占むるもの、民間に行はるゝ實語敎、女大學、庭訓往來等皆な純然儒敎主義なり。此の時代に養育されたる樂翁公、亦何んぞその環象の外に出でんや。公が婦人を訓戒するの言は、儒敎より來り、引證することは支那の史實なり。然るに余が爰に之れを記する所以のものは、敢て公が新奇の說を吐露せしが故にあらず。又時代に超脱せる卓見ありしが故にもあらず。蓋し公の婦女訓は、要するに公の創見にあらずして、彼の時代に流布したるものを、敷布したるに過ぎざればなり。唯彼の社會にありて妙齡の

青年たる公が、家庭に關して極めて心切なる情ありしを紹介せんと欲するのみ。我れ思ふに古より大人豪傑と呼はるゝの士は、家庭に關するの觀念切なるものなり。今之が一例を發表せんと欲するのみ。「難波江」は安永五年公十九歳の時にして、公が新婚の後、夫人の懇請に應じて、婦女の訓戒となるべき條々を記して、贈與せられしものなりと謂ふ。そのはしがきに曰く「ふるきはうごより、この卷とりいで見侍れば、こは安永の頃、予がかきつゞりて峰子へおくりしをひめおかれしなり、もとよりつたなき言の葉、たぐひなき物から、さき人の手ふれけんと思へば、さすがに捨がたくて、そのよししるしつゝ、おさめ置侍るもの也、文化二年八月、定信」と

その中に記する一二の言は則ち左の如し、

「一、それ男女は則天地陰陽の道理也、女は陰の徳にして專らにする所なきことにて候、子婦無私貨無私畜無私器と申候て、幼なるときは父母に隨ひ、嫁すれば夫にしたがひ、夫死すれば子に隨ふ、是を三從の道と申候、專らになすことなき故一ッの器一ッのたから皆わがものにてなく候と申候事にて候

「一、女の徳は、無非無儀と申候て、男の行ひとは格別にて候、温和貞靜にして、專制の義なきを貴び候」

三從の道は、禮記に教ゆる所にして、婦人從人者也とは、我邦にて支那と交通以來、抜くべからざる眞理として奉ぜられたり。或る學者おもへらく、婦人は婚姻の爲めに、全く男子に附屬して、奴隷の如き有様になり、常に子供と均しき位地を保つものなりと。二者共に牝牡陶汰の法則を知らず又兩性互の本體、及能力を誤解したるに坐す、婦人には一の器一の貨も屬せずといふに至りては。苛酷とやいはん。

「一、女は教令不出閨門、事在饋食之間と申候わけは、教令することもおくの内のみにして、しきみを出でず、つとめは、只食をとゝのへなどするのみにして、外事をなさゞる事にて候、しかし食をとゝのふるは、小人の婦のことにて候へども萬づの事に心得あるべく候、哲夫成城哲婦傾城懿厥哲婦爲梟爲鴟婦有長舌維厲之階亂匪降自天生自婦人、かくの如く詩經にあり候故猶更女はことずくなにして外をいはず、女の才高く巧言なるは亂のきざしにて候はずや、紂の妲己、幽王の褒姒、呉王の西施、獻公の驪姫みな巧言令色にして、つひに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

國を亂し申候、牝雞無晨牝雞晨惟家之索也と申候へばかへすく〜も非なく儀なきの所を行ふべきことにて候」

寡言を以て婦德となすは、東西その揆を一にす。唐令を摸倣したる我大寶令には、妻を棄つる七出狀中に「口舌」を加へたりしなり。

「一、それ衣は寒さを防ぎ、食は饑をたすくるにさへたらば、又外に求むべからざるよし、古より申傳候、しかるを、今やその女は奢侈を専らにし、髮のかざり、衣までにも、金玉をつらねて、質素なることをきらひ候、漢文帝御寵幸を得し愼夫人、衣地をひかず、帷帳文繡なしと申候を、古より美談にいたし候、ものゝふの家に生れし女は、猶更質素にして、萬づ古風をしたふべきことゝ思はれ候、しかれども、女の物いりがほにならはしに背くは、また見にくき、物にて候」

公の時代は、大に世の風習亂れて奢りに耽ける樣なりき。公がものせし國本論をはじめ種々の著書中に、質素の生活を說くこと切なり。女の特更らに質素ならんは、奥ゆかしくめでたし。

「一、曹爽がいとこの文叔のつま、名を令女といふ、夫早く死し、年若くして子なきを以て、又再び嫁せんとす、よつて令女髮をきり、兩耳をきりて、再び嫁すべからざるをしめす、其後、曹氏ことぐ〜く誅せらるゝによりて、令女が叔父、曹氏とえんをたち強て令女をむかへてかへりをらしむ、其後また嫁すべきよしを、人の言ければ、鼻をきりて信をしめしぬ、或人令女にいひしは、それ人の此世にあるや、草の葉末の露ちりの如し、何ぞかくまで心をくるしめるや、かつ夫の家ほろび盡ぬ、今誰が爲とて節を守り給ふぞとゝひしかば、令女對て曰く、吾きく仁者はさかり衰ふるにつきて、節義をあらためず、義者は存し亡するによつて、心をかへずといひけるとぞ、いまの世までも美談にいたし申すことに候」

「夫死不嫁」とは、禮記に教ゆる所にして、其趣旨、婦人は人に從ふものなりとの主意より來れるものに外ならず。然れども右の美談の如きは今日の一種輕薄なる婦人の良藥とするに足らん。臣は二君に見えず、妻は二夫に嫁せざるをもて、我が良俗とはなすなり。

或女學生年若き細君に向ひ。あなた乳母をお置きなさるなら、よく其性質に氣をお注けなさらないではいけませんよ。何だつて乳母の性質も乳

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さは大變な關係を持つんですもの、若し善くない性質だと赤さんまでが夫れにおうつりなさい升から。細君驚ろき、夫ジヤア、迚も牛乳では育てられませんネイ。牛に似るでせうから。

兒籃

老ひたる象の話

若松しづ子

佛人でジヤコリオツトいふ人が、象一式の事を書いた書を著して居り升が、其中に、餘り可愛らし話しが有升から、皆さまのおなぐさみに記して見ませう。著者自身が語るまゝを寫し升から、其思召で、お讀下いまし。

私は二十年ほど前に、印度に假住ひしたとが有升。其年の暮の休暇に、私は舊友をコーンポアといふ、ガンヂス河の岸なる市に訪ひ升た。友人の名はダレといつて、土地に多年住なれた、一の陸軍士官でした。其部下には、澤山の兵卒も多く居り、土人の僕婢も大勢居り升た。其外に象を數多く飼ひ、牛車なども夥多遣つて居り升た。

私が其家に着したあくる朝、土地の風俗にならひ、未明に起出で、茶など呑み、友人と共に椽先へ出て、烟草くゆらしつゝ、有名なる大河のうねり流るゝ景色を遙かに眺めて居り升た。フト思ひ出したのは、友人の子供のとで、（友人には男兒と女兒とあり）まだ子供衆にお目に掛りませんが、いづれにお出ですかと訊ね升た。友人は何氣なく答へて、

ナニ、スーブレメチが二人連れて、魚釣に行升た。

私は聞いて驚まいとか、我知らず、黄な聲たてゝ、

イヤ、なんと仰る？スーブレメチといふは君、側の軍用象ではないんですか？

さうとも、君はまさか、あの[illegible]のとを忘玉ひはしまい。どふして、忘れる處じやない、丁度、あの狂象と戰つて、美ごと、[illegible]を倒した[illegible]居合せ升たもの。先の象はたしか米の俵をあすこらあたりの河舟へ積でる時でしたナ、狂ひ出たのは、僕の見た時は、象が俵を河ゝなかへドシ／＼投げ込み始めた時分でした。象追が折角とめ樣とすると、可哀さうに即坐に踩ころされてしまつたつけ。舟頭たちはみんな匿れつちまふ、合手がなくなつたもんだから、こつちを睨つ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

て來升たつけナ、恐ろ敷權幕で。スルト、運よく、アノスープレメ子が居合せて、こゝに居た子供に怪我をさせまいと思つて、自分の身を間へ狹んだ其素早さといつたら子。それから、守と子供たちが、家へは入るや否、大合戰を始めたつけ…………

友人は其時、靜かに、

さ樣さ、スープはあの年が、モウ百才で子。元より軍用の象で、あの時もまだ、豺位の合手にはなつたらうが、獵にはモウ駄目だつたんです。

私は其日の景況を思すに付け、ます／＼大意氣込になつて、いよ／＼其折の勇ま敷合戰を眼前に見る者の如く、

夫にしては、何といふ猛烈な威勢だつたか子！君記臆し玉ふだらう、こゝの玄關にみんな寄つて立つて居たつけが、たゞ見物してる計りで、銃を放すとも思ひ切つて出來ないんだもの、スープの方へ當る恐れがあるから。それから、凱旋して歸つて來た時の有樣子、覺へて居玉ふだらう、一時半も奮戰した上句だつた子、とう／＼敵を砂の上へ倒したは好が、あの大きい耳は兩方とも破衣の樣に裂ける、頭は磨むける、牙は片／＼中ほどで折れてしまつて居たが、それでも、あの歩み振りの勇ま敷かつたとは子？

其通りでした、それで、あれからといふもの、また一層、うちの子供を可愛がつて、助ばつてくれるんです。終日つれ出して遊ばして來て吳れるが、僕はあれが一處の間は聊か心配なしです。土人は却つて安心のならぬものがあるです。異敎徒の子といふので、どんなとをしまひものでないが、スープならば、更に案じるとはないんです。

これは驚き入る子、君は十才以下の子供を、いかほど馴れたといつても、獸類に托して、他の保護は要さないのですか子？

さうとも、疑ひ玉ふなら、僕と一處に來て見玉へ、仲よく釣をしてる處へ行つて、可驚ろかして遣りませう。

私は友人のあとに續いて、十町計りも川岸沿ふて行升た頃尋ぬる魚釣りの一群に出逢ひ升た。兄のチムは十才計りで、彼は樣ざまに兩足を投げ出して居り升た。二才計りも下で有らうと思れる妹も、矢張り側に座つて、兩人とも、釣竿に附いた、コルク製の浮が水の上に頷く鹽梅を打守つて、餘念

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は有ませんかつた。兩兒の傍ら、殊に、妹ベセーを、大黒柱の如き六足の間に、人形を坐らせた樣に、掻い込んで立つて居たのは、例の大象で、其鼻の先には、大竹の釣竿を持ちそれに、針、糸、浮、餌等をつけたとは少しも子供等のと變りませんかつた。私は申までもなく、子供は暫らく措いて、幾多の戰功を擔ふた此老將に有丈の注意を向け升た。

間もなく、スープの竿に手でたへ（オット）鼻でたへが有つた樣子でした。全躰、ガンヂス河は土人が神聖のものと尊崇するので、元より殺生は大禁物故、魚類は夥く多いとでした。スープは中〱身動もせず、小さな眼を瞬ろかせもせず一心に竿を見守つて居升た。こゝを看ると、此術に掛けては素人どころでなく、中〱の巧者らしい、獲物の擧る機會を窺つてヂットためらつて居たのでした。

とふ〱竿を引擧ると、ガンヂス河の名物なるテンチといふ立派な獲物でした。スープは自分が立派な魚を釣り擧げたと見升た時、象が滿足をあらはす折に出す、甚く低い、咽喉を鳴らす樣な音をたて升た、さうして、ヂムが獲物をとつて、餌を新ら敷つけて呉れさうなものといふ顏で、辛抱して待つて居り升た。併しヂムは疾よりスープを面白半分にいぢめるとが有つて、此時も、私どもに眼くばせして、一寸一ト狂言おめにかけ升といわぬ計りな得意顏になり、さて、スープの針から魚をとつて、持參の水瓶へ入れたとは入れ升たが、例に外れてわざと餌はつけず、平氣で我竿の有る場處へ歸つてしまひ升た。象は悧巧ですから、空針を水に投ずる樣なとは致しません、低い哀願の聲を擧げて、ヂムの心を動かさうとし升が、ヂムはわざと知らぬ顏して居り升。スープは益〻聲を優しく致し升た、ヂムは只笑らふ計りで、立ない處を見て、スープはまだ我意を恃つて呉れぬと思つたか、今度は鼻をもつてヂムの頭をあちらに向け、是非餌箱を見せる樣にと仕かけ升たが、其策さへ成効しませんかつたから、稍あきらめたかの如く、法方を變へて、急に餌箱を引さけて、友人の前へ運び、次に竿を取あげて、それと言葉で賴めぬ悲しさに、たい主人の前へさし出て居り升た。友人は

スープ、これをどふせいといふのかナ？

と態〱空とぼけ升た。象はもどかしさに、大足をあげて、ヂタンダを踏み例の哀れ氣な聲をたて始め升た。私も面白半

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

分チムの肩をもつて、餌箱を拾つて、持逃げしにかゝり升た。併し流石辛抱づよひ象もまんざらの他人にまで馬鹿にされるは如何にも心外で有つたと見へて、素早くガンヂス河へ鼻先を浸して、一ト吸すつた水を、火消ポンプの威勢で、私に浴せかけ升た。子供たちは此時大笑らひして打興じ升た。友人は直ちに、スープに命じて無禮な擧動をやめさせ升た。さうして私も此得難き老將と和睦する爲に、自ら其針に餌をつけ升た。スープは赤兒が一旦奪れたおもちやを再び與へらるゝ時の樣に顔へて悦び升た。さうして優き聲音に悦びを示して、私に禮いふ暇さへ惜いかと思ふほど、大急ぎに元の場處へ歸つて、河水にたつさゞ浪の間に戰く浮を、餘念なく打守つて居り升た。

○男山にて女郎花を見て　ふるのいまみち

をみなへし愛しと見つゝぞ行過る男山にし立りと思へば

アー女郎花なば、あゝいたづらな女ぢやと思ふて我はよそに見て通り過てゆく、こゝは男山なれば男の中にまじつて居る女じやさ思ふによつてサ。

史傳

島津淡路守内室の述懐

一名、女武勇の辨。

正徳年中、島津淡路守惟久の内室は、薩州中將綱貴の娘なり。智仁勇三徳に叶ひ、常に軍書をすさみ、召仕ふ女まで武藝を勵ませ玉ふ。惟久隱居して鹿兒島へ引籠り被申候節も、内室は江府に殘し置られしが、此内室の腹に、又四郎忠執出生あり、家督を相續し後に但馬守と申ける。或時に、内室、惟久の家老伊集院熊之助と云者を招き、其方は、島津家にして數代の家臣、父祖の武功天下に隱れなし。公儀の目錄にも、其事明白、是皆子孫の譽れなり。それに付、我等所存の程其方へ語り聞せ度とあつて呼寄たり。我常に武道を表とし、武藝を第一と心懸ぬるに依りて、召仕ふ女迄、自然と覺え、不得手の者も習ひはげみて、終に其志を盡しぬ。然ながら、女の身としてあまりのようにも思はれんかなれとも、我等の所存

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

と云よは、今天下の御政法、正しく四海泰平に治り、弓は袋に入て、誠に靜謐なる世の中なれば、男さへ遊藝のみに暮し、たま〳〵武藝に心掛るものあれ共、遊人共の爲に是も終には歌三味線の上氣に誘る。いわんや女の身として武藝はいらざるよふに思ふ。今ま天下の威勢、誰かしたがはざるはなし。然しながら、無レ據意恨を差挾み、時として軍に及ぶともなきにあらず。既に遠からざる稻葉堀田、吉良淺野、府田織田等は、私の意恨止事を得ずして、刃傷に及べり。淺野は斷絕、吉良は安穩なるに依て、淺野が家來大石内藏助父子を初とし、義士の者共、吉良を討し也、然るに、上杉綱憲は現在吉良の實子なり、夜討と聞くや否や、吉良の家形に罷越し、勝負せんとありしを、家臣の何某、諫で云く、君は上杉の嫡子ならずや、夫に今ま吉良家に異變あらばとて、出馬可レ有に非ず。上杉の家を續ぐ身として、私の意恨に、上杉の家を失ひ給はんも計りがたし。それとも緣を切て御出被成候はゞ、御心次第に奉存候。去ながら離緣被成候はゞ、御家來は皆上杉の人なる故に、一人も御供には不二罷成一候。君御一人なれば、御出可被成と申ければ、綱憲も是非に不及、留り給ふよし也。君々たり、臣々たり、故に能く治る。若し又諫を不レ用、臣も亦而レ諫器量なくば、上杉をも共に又意恨を含むとこならずや。よく治る時節に臨みては、武家に生るゝ身は、女なりとも其分別致可レ置なり。淺野は吉良が爲に身を亡したり。然るに其妻として、家來計りに敵を討せ、剩へ家來四十七人には切腹いたさせ、其身計り無事に暮す事、本意と云べきや。女なりとも、大石を初め義士の面々を亡はせし夫の敵、吉良が首を取て、内匠頭へ手向なば、靈魂泉下の恨を晴し申べし。然るに、其身は奢りを事とし給ふは、淺間敷となれ。往古にも、夫婦一所に討死したるもの多し、殘念なる哉一城主の妻として、其心懸なくば何ぞ語るにたらんや。

女を陰となし、女の徳は陰徳なりとして、公けに露わさゞるを旨とせし國柄にては、歷史傳記に揭げざる無名の佳人多きを論ずるを待たず。心なき人々、海外には名高き婦人多くして、我國には乏しなど誣評するを勿れ。月光雲間より漏れて、はしなく世人に仰がれたる三四の女性に付きて之を言はんに、神功皇后の如き、政子の如き、紫式部の如き、遠く海外に匹儔を求むるに及ぶもの尠なきことを知らずや。

文藝

歌學枝折

鈴木弘恭

歌を學ばんにはまづ三代集を讀むべし。三代集とは、
古今集二勅撰。後撰集二勅撰。拾遺集二勅撰。
是れなり。傍に又語格を習ふべし。其用書には、
活語圖一私撰。詞乃栞一私撰。語格口授一私撰。百人一首講義
等見るをよしとす。
次に五代集を讀むべし。五代集とは、
後拾遺集二勅撰。金葉集一勅撰。詞　集一勅撰。千載集二勅撰。
新古今集四勅撰。
傍には又、
玉の緒七宣長。八衢二春庭。歌話類。影　袋富士谷成章
等を讀まば、益する所多かるべく、又
秋の寐覺二有賀長伯。古言梯一魚彦。雅言便説一私撰
等を座右に備へなば、便利少なからざるべし。

次には、十三代集を讀むべし。十三代集とは、
新勅撰集二勅撰。續後撰集四勅撰。續古今集三勅撰。續拾遺集二勅撰。
新後撰集三勅撰。玉葉集四勅撰。續千載集四勅撰。風雅集四勅撰。
續後拾遺集二勅撰。新千載集四勅撰。新拾遺集二勅撰。
新續古今集四勅撰。
等是なり。其傍には、五抄二子を熟讀せよ、五抄二子とは、
八雲抄六順徳院。奥義抄三藤原清輔。悦目抄一藤原基俊。袖中抄五釋顯昭。
無名抄二鴨長明。袋草子四藤原清輔。枕草子三清少納言。徒然草二兼好法師。
等是なり。次に、古代に遡りて、創始時代の
万葉集二十。神樂一未詳。催馬樂一未詳。古今六帖四紀女。
等を讀み、其傍には、
冠辭考十　冠辭考續貂七　怜野集十二　草野集十二
等を見、其他大家の家集を見ば、利する所少なしとせず。
次に、日記物語類を見よ、即ち
土佐日記二。十六夜日記一。更科日記二。紫式部日記二。
蜻蛉日記七。
伊勢物語二。大和物語二。竹取物語二。落久保物語四。
源氏物語五十四。狹衣物物十六。宇治拾遺物語十五。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

古昔物語二十

右の外、傍に讀むべき書は、

扶桑拾葉集四十八○文苑玉露二○

其他、大家の文集を見るを要す。又

和名抄三○拾芥抄四○和訓栞三十○雅言集覽五十七○

等を座右に備へ置かは、便利少なからざるべし。

是より追々進むに從ひ

古事記○六國史○四鏡○榮花物語

等及び、律令格式の如き、隨意に讀みもてゆかば、順序を得たるものならん。

交詢

○孤兒院救助の方案　水戸　高階生

拜呈貴社雜誌三百六十三號拜讀孤兒院義捐金一法中紙屑賣拂代云々は、小生も已に去月より實行致居候。小生のは單に紙屑に限らず一切古物賣拂代を集め置きて一年の終りに孤兒院へ寄附せんとの都合に御坐候。何卒天下の慈善家一同、僅々の紙屑賣拂代丈にても貧民の爲めに費消せば其貧民心の快樂を得らるべし。小生は數年前迄異域に在て非常の困苦を嘗めたるが故に貧民を見る時は直に心を動かされ候。頃日一妙案を考へ出して實行致し候。勿論極少數の人々のみ實行し得るものなれば餘り妙案にも無之候へ共又一新案には相違なきかと愚考致候。其は自分には一文も損を爲さずして貧民に若干圓の貯金を爲さしむる方に御坐候。其法、此頃近邊に郵便切手賣捌所ありたるも轉宅したるが爲めに郵便局より從來の郵便箱のある近所のものへ切手賣捌を依賴せんも皆日雇人足の類にして數圓とまとまりたる金子を所有するものなし。小生よりて出入の一人に五圓を貸與し郵便局の引受を爲すべしと申告げ、定期の利益丈を其都度元金の內へ拂込ませ、其利益は元金悉皆拂込候迄は流用するを禁じ一切小生看督を爲し居候。一月三十圓の賣上ありとせば三四月の內には五圓の貯蓄を爲すを得べきなり。此れ誠に僅少の收益なれども極確にして又本人の心を傷くるが如きとも無之と存候。只此事業の多數の人に實行し難きは遺憾なれども全く爲さゞるには勝ると存候。世間の事熟考するときは如斯き慈善の方法なきにしもあらざる可し不一。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○同じく一新法

前の説に因みて記すべき一つの新法は、近頃ろ府下牛込の納所永次郎氏が發企に成れる所のものなり、同氏は多年新聞賣捌の業を營なまるゝを便りとし、購讀の客に新聞紙の定價通りにて支拂をもとめ、幾分の利益を收めて慈善事業に義捐せんとはせらるゝ也。蓋し方今新聞賣捌者のうちに追追はげしき競爭ありて、多少定價よりも減ずるを常とするものなるが、讀者の方にては、反つて本社に直注文し、定價通りに支拂はるゝ人も亦多きとゆへ、此趣構は至極尤ともなる思付なりと云ふべし。斯くて五百人の約束あらば、月五十圓の益あり。入費を省きても二十五圓乃至三十圓の純益はありとぞ。

納所氏は、すでに四百餘人の約束購讀者を得られしよし。而して遠からず、夜間貧民學校と、晝間子守學校とを、同所にて開かれんとする計畫ときく。

孤兒院救助の方案につきては、倘ほ四方君子の高見を寄せらるゝとの多からんを待つ。

逸事

○白衣皓々、天女の如し

米國スチーブンス女學校にある松田道子女史近信の端に、去る木曜日より學校始まり申候、實に〳〵何もかも一時に致しゝゆへ、忙がはしく候。ラテンの文法は實に六かしく御座候。小女は餘り多くの學科を一時に修め居候所、皆々不完全に候。しかし奇妙に候、小女は初對面の時より校長ミス、スチーブンス(孃)を實に敬愛いたし、何事も氏の仰せには自然と心より服すると出來申候ゆへ、六かしき時も勇んで勉强いたし居候。ミス、スチーブンスの爲の勉强にては無之候得共、教師の信不信は生徒に得るは、學校全躰の運動に非常の影響を與ふるものかと存ぜられ候。

同孃は實に驚ろくべき婦人なりと、誰も〳〵申候。生徒一同は深く信用いたし居候。脊髓病にて二十年の間常に長倚子の上、一室の内に靜居いたされ、教授と自修とに

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

餘念無之して、伊太利亞、佛蘭西、獨逸、羅甸等數ケ國の語に通じ、歷史にても數學にても自由に教授し得べく候。小女の最とも敬服する所は、かく博學にてあり乍ら實に謙遜にして婦人の德皓々しく有之事に御座候。常に白き服を裝ほひ、天女の如くにて有之候。如斯き婦人の敎育者日本にあれかしと、數々土倉政子さまと話し候。

書架

○人生哲學　　しづか

萬有は無覺より出でゝ、無覺に入るか。有覺に始まりて、有覺に終るか。天の文、地の章、春花秋月共に是れ、偶然の所作か、將た有爲の所作か、抑は吾人の信念に一任すべきのみ。萬籟寂として、四隣物靜かなる深更、獨り澄然として、過ぎこしかたを顧りみ、行末を想ひ思へば『人生果して何者ぞ』何處より來り、何事を爲し、何處に行くべきか、の問題、忽ちにして起る。『人生問題』は徒らに、信仰に任せ、生意なき理屈に從ふべきものにあらず。蓋し人生は空を以て、空を打つが如き、漠々として見別ち難きものにあらざればなり。冷淡なる理屈を以て、推測し來れば、人生は淺果敢なるものなり。淺薄なる思想を以て、想像し去れば、人生は味氣なきものなり。人生果して淺果敢なるものなるか、果して味氣なきものなるか、こは漫に各自の信仰と、想像とにのみ一任すべき問題にあらず。

本書「人生哲學」は、リー博士の新著にして、高橋五郎君の譯になる。其所說を以て哲學的とし、若しくは科學的とするに於ては、われ多少異見なきにあらずと雖も、稍公平に人生問題を釋義したるものあるを疑はず。蓋し本書は、重もに信仰と希望とを以て滿さるゝものなるが故に、所說往々淺薄なるが如くにして、却て深奥なるものあり。之を以て哲學者、科學者の專門家に適せずして、寧ろ一般讀書社會に適するものなりと云ふも不可なからん。

女の文にかしくとかく事、古くよりなり。日本紀に、恐懼の字をかしこしと點したるに同じ意なり。阿那恐と云ふアナは古事記の自註に、甚切なる時の詞とあれば、誠恐なといはむが如し。字を假りて穴賢とも書たるに付て俗說あり、用ゆべからず（平山記聞）。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

◯女學視察

岡山女學校々長望月興三郎氏、女學視察の爲に東上せらる。西京同志社女學校敎頭松浦氏も亦た同じき主旨にて、遠からず、上京せらるべしとぞ。特に女學視察の用を帶びて往來せらるゝなどは、公私ともに餘り聞かぬとなりしを、此時勢眞とに賀すべし。

◯青年の女子敎育法討議

女子敎育法の事容易く論ずべけんや。然るに堂々無難作に大論壯議せらるゝ所の人は、未だ毫も斯事に經驗あらざるのみか、妻子すらなき青年に多しとす。かゝる無責任の論議のみ無作法に新聞紙上に横行するは歎かはしからずや。

◯相川かつ子

女子高等師範學校卒業後六年間獨逸國に留學し、近頃ろ歸朝せられし相川かつ子女史が「獨逸國に於ける家庭の敎育」と題するもの、大日本婦人敎育會雜誌に出そめたり。

時報

◎學校教育

●採用の期、競爭の弊　修身教科用の圖書にして文部省の檢定濟となりたるもの既に七八十種而して此の數多き圖書中より撰擇して愈よ採用さるゝは來る四月即ち新學年の初なるを以て教育書肆は宛も議員撰擧の際各候補者が狂奔熱中して勝敗を爭ふと一般頻に一種の運動をなして自店の利益を爭ふその有樣近來益々烈しく醜聞の醜聽くに堪へざる地方なきにあらずその圖書の採定は各府縣に於ける審査委員に於て議定するものなれば書肆の運動は此の委員其人に取入る策略に外ならざれば或地方の如きは審査委員が書店の代理人若くは關係人と往來するや否を監察する爲め巡査を尾行せしめ以て文部大臣の訓令を實際に勵行せんと企て居る由なれども書肆の策略なか〳〵巧にして單に直接の運動を試むるのみならず都下の貴顯若くは有司に依頼し迂回々々して審査委員を說くのみならず政黨の政派の葉振能き地方に於ては其黨派に縋りて其派其黨の縣會常設委員に吹き込み巧に贊否の言を審査會に發せしむる工夫もありといふ之を要するに審査委員會を闘鏡する空氣既に斯くの如くなるに拘らず委員會は秘密會なるを以て嬌弊の策は唯形に流るゝのみと知るべし故に修身圖書の著述若くは出版者中には競爭の入費に堪えずして採用の望みなかるべしと爲に落膽し居るものもありといふ（時事新報）

●女學講習所の設立　女子教育熱心の人々は今回名古屋市に一の德育女學校を設立するの熟議を遂げ當市長島町四丁目の小櫻氏隱宅を以て講習所に宛て差向のところは女子講習所と名づけ岐阜縣にて女教師たりし連さは子（女子師範學校卒業生）を普通教科の主任とし國文、和歌、作文、修身等は當市に名ある野村秋足、大島爲足、林陸夫の諸氏交交出席して自ら教授の勞をとり習字は牧光篠氏其任に當り其他禮式、裁縫の教師も日日出場するよし漸次擴張を圖り遂には完全なる高等女學校となさん計畫なりと因に云ふ其教授科目は讀書、算術（多く珠算）、習字、裁縫、作文、修身、家政、地理、歷史、國文、和歌、禮式（隨科に茶花）等にて其望みに依り一科若しくは數科の講習を受くるを得せしむるの組織なりと云ふ（新愛知）

●小學校裁縫科教授法に關する意見

熊本市尚絅女學校長内藤儀十郎同教師合志林藏兩氏は小學校裁縫科教授法に關し左の意見を井上文部大臣へ差出したりといふ（九州教育雜誌）

不肖儀十郎謹て言す女子の就學者を增すは可成的學科を實用に近からしむるに在りとて尋常小學にも裁縫科を賦課せらるゝ旨今般各府縣へ御訓令相成りたるは不肖等の常に仰望する所にして實に感激の至りに堪へず夫れ一人の裁縫教師にて多數の生徒を教授することは學校經濟上最必要の事なり然るに從來の裁縫教授法は大抵左の三個の弊ありて多數の生徒を教授する能はず又大に進歩の遲緩たる所あるを見る

第一　同級生の裁縫物個々別々なること

各地方裁縫教授の現況を察するに大抵一人の教師にて十四五名乃至二十餘名の生徒を一教場に集めて教授するを常とす然るに單物を縫ふ者あり肌着を縫ふ者あり小供衣裳を縫ふ者あり袷羽織綿入其外編物等を爲す者ありて凡五六種乃至七八種に判れたり一通りの說明をなすも猶一時間餘を費さゞれば結了せざる程なり是以て教授中質問蜂起して教師は左顧右盼之が應答に遑あらず遂に生徒の厭倦を來し左隅には雜談右隅には居眠りを爲す等實に不躰裁の有樣なり斯の如きの教授法にては一時間の授業何程の事をも成し得る能はず多數の生徒を教授すること望む

可きに非ず

第二　分解法を用ひざるが故に教授上困難なること初めて針を持たしむる幼年生に最初より小供の肌着とか單物とかを以て總合的に教授するが故に針は動かず縫方は知らず質問四方に起り教場益々喧騰して教授彌困難なり亦豈多數の生徒を教授するを得んや

第三　同一物を數回縫はしめざるが故に進歩の遲緩なること

從來の教授法を見るに今日は單物を縫ひ明日は袷を縫ひ又其翌日は肌着を縫ふと云ふ有様にて時々種類を取換へ同一物を數回縫はしめざるが故に手指の練習を欠ぎ又觀念を鞏固にする能はず是大に進歩の遲緩なる所以なり之に加ふるに今の裁縫教師たるもの多くは一時雇ひの人にして教授法管理法の何物たるを知るもの鮮し斯の如き教師を以て斯の如き教授法を執る女子就學の少なき亦宜ならずや且今日算術習字科等の教授法を見るに往昔に比すれば著しく進歩せしに裁縫科に至りては依然として舊慣法を改めざる者は大抵世の教育家たるもの裁縫は男子の知る所にあらずと云ひ棄て顧みざるに由るなり非教育家中該科の教授法を研究し管理法を講説したる者果して幾人かある然らば則之を講究して習字算術科と並進せしむることは最目下の急務にして畢に之を婦人にのみ放任す可らざるなり

林藏昨年二月より五月に至り東北地方より東京間又西府各地を漫遊せり其際裁縫科教授法の能く教育の理法に合ひ又一人にて多數の生徒を教授し得べき法を調査せしが西府の地方は勿論東京市中有名の女學校と雖此法あるを見ず獨り此法あるを認めたるものは宮城縣下仙臺市元荒町朴澤三代治氏の設立に係る私立松操女學校の裁縫科教授法のみ尤該校の課程は裁縫專門なれば頗る高等にして直に之を普通學校に實施するを得ざるに由り歸縣後[illegible]多少其課程を[illegible]教師の練習を目的として生徒凡そ四十名を集め昨年夏期休業中七月下旬より八月迄毎朝三時間づゝ右朴澤流の教授法を試行せしに頗る好成績を得るの見込あるを以て九月以來斷然之を實行せしが本年四月に至り頗る好結果を得て生徒の進歩[illegible]顯著なるを覺へたり今其實況の概略を擧げんに昨年九月初めて此法を實行する頃は二尺五寸の素縫布を以て針目一分五厘と定め直縫のみ爲さしむるに三四十人の生徒中最早く縫ひ了るもの凡そ五分時間を要せしが今日に至りては早きものは一分間以內晩きも三分間を出でず又單物の組織へ一人を一組として皆手明なる様にして一個の單物を縫はしむる法也〜を爲さしむるに之を裁ち[illegible]を縫ふに早きは四十分以內晩きも一時間を出でず右は當校四年級の生徒にして出席等小學校四學年級の生徒に相當するものなりしかして其手際の如きは衆人の前に出すも格別[illegible]かしからずとの公評なり爾來益改良進步を[illegible]りしかば縣內各地の教育家來りて教授法を觀るもの續々絶へず既にして熊本市內各尋常小學校の如きは熊本市教育會の決議に依り體操科の時間を以て裁縫科に代へ四學年級の女生徒に此法を實施せしが一週僅かに三時の教授時間にして本年四月より七月迄の僅少の月日なるにも拘らず頗る進歩の實況を呈したり斯る有様なるが故に熊本市の如き本年度は四學年級より裁縫科を賦課したるも來年度よりは三學年級より賦課する筈にて當時其計畫中なりと云ふ

◎教育篤志家　長崎縣南松浦郡五島富江の舊領主五島聽千代氏の後見人政子仝祖母高子の兩刀自は平素儉德を尚び只管意を教育に注ぎ仝地の子弟を扶助して身を立てしめたる者一百十八名の多きに及び尚修學中の者數多ありといふ仝郡富江に於て此度高等女學校を新築せしに敷地八百坪及金六百圓餘を寄附して其用を辨じたりと兩氏の如きは實に得難き教育篤志家といふべしと日本に見ゆ。

◎美談

●二孝女　千葉縣山邊郡公平村松之鄉に松井幸太郎（五十餘歲）となん呼べるものあり妻お何との間に四人の子供ありて妻は昨年中死去したり元來此の幸太郎は身貧困にして或は他人に雇はれ或は山林に入りて薪を採り僅かに米鹽の代を得るものなるが奈何にせん性來酒好にて懷底の錢あるときは直に酒屋に走り行くを常となし、それがため米代にも差支へ妻子饑に泣くこと屢々なりしが茲に感ずべきは幸太郎が二女のモヨと云へる者あり此の兒は當年十一歲なるが少年の身に似合はず我家の家計を憂へ日々の如く山林に入りては薪を拾ひ來たりて之を姉トメ（當年十五六歲）に負はしめ近傍の市に賣りて米代を得生活の助となせり又長女のトメは啞者にして且錢の勘定も出來ざる魯鈍なれば少しも家計の用をなさずモヨは外に一人の弟（當年八歲）一人の妹（四才）あるを親切に世話し殊に天性孝心深きが故に父幸太郎が村の祭事、若くは葬式等ありて飲食する際は傍に附添ひ居りて懇篤に介抱し無難に家に連れ戻るなど心ありて其志を感ぜざるものなきに憐れや子の心親知らずに幸太郎は自分勝手に他行して唯今行衛知れずと云ふ又同村の舊番人の娘にサダ（二十六、七）と云へるものありサダは一人の兄あり西之助と呼ぶ西之助は今を去る七八年前逃亡して以來何れの地に身を寄するや更に音信なく繼母（當年七十餘歲）を養ふべきもの他になければサダは辛苦艱難[illegible]繼母の衣食に[illegible]食物の如きは身分不相應の奢をなしサダの苦辛一方ならざるもサダは少しも繼母の意に背かざるのみか今日まで未だ夫を持たずして孝養を盡くし居ると云ふ、如今人情輕薄道義地に墜ちたる世の中此の如きの二孝女容易に得難し（東海新報）

●婦女の龜鑑　廣島縣佐伯郡平良村山中タニ（五十四）は三十二才のとき其夫に死別れたるが其後タニは七才になる長男市松を頭として男女都合四人の子供を一人の腕にて養育し貧苦のなかにも子供に襤褸などを纏はすることなく相應に洗濯して之を着せ且つ毎日朝夕一度づゝ四人の子供を連れて夫の墓詣りをなし其節操の確固たるを見る感心すべきほどにして他の後家などは夫に死別れし當座こそ歎げき悲しむも忽ち身を持崩せどもタキに限りては毛頭此ることなく二十二年間恰も一日の如く其節操を守り來り此頃は市松も相當なる大工となりしよりタキは一方ならず喜び夫の墓參を怠らずあるよし感心なる婦人にこそ（藝備日々新聞）

◎片々

●福岡禁酒會、結婚例　同會にては昨年十一月十八日、同地赤木氏宅に懇親會を開かれ、頗る盛會、同會は會長栗村惣衛兵氏の下に、現在總員八十六名あり、松隈正樹氏等最も奔走盡力せらる、尚同會が評定せる結婚例なるものを得たれば左に掲ぐ

結婚例

一　仲立人又は司會者は結婚者二人及來會者に向て婚姻の社會組織上に重大なるの理由を述べ公然左の箇條を盟約せしむ

第一　夫婦たる以上は一身同體なることを記臆し一致の目的に從ひ家政を務むる事

第二　夫婦は互に睦しく夫は妻を愛護し妻は夫を敬愛し夫は男子の權利と義務を全ふし妻は女子の權利と義務を全ふし互に遜讓を旨として相侵さゞる事

右の仲立人又は司會者の陳述終る時新郎新婦は左の答をなす

答　此二ヶ條を終身遵奉すべきことを盟ふ

一　仲立人又は司會者は新郎新婦の前二ヶ條を終身遵奉する事を盟言せんことを來會者に紹介し結婚式全く結了する旨を告げ以て終とす

（護國の楯）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

花の家胡蝶大人著

素人料理

年中總菜の仕方

實價金廿五錢　郵税金六錢

此『年中總菜の仕方』は、既に本紙三百五拾號に於て公評せられたる如く、文章も凡ならず、卷中の料理法極めて多くして、皆な實際に適し、最とも有益なるものと信ずれば、今回弊社に於て之を廣く取次販賣す、世の主婦たる人の必携すべき書なり、

近藤嘉三先生著

言語作法

貴女の心得

實價金拾四錢　郵税金四錢

本書の目次は、淑女の心得、夫の心得、化粧の要訣、談話の心得、訪問の心得、賓客接遇の心得、室內粧飾法、和歌の書方、香道の心得、茶道の心得、新式和洋挿花法、家庭衛生法、其他數件、一々圖畵を以て平易に説明せしものにして貴女の友たるを得るものなり、

巖本善治君著

女學叢書

木村鐙子小傳

實價金八錢　郵税金二錢

木村鐙子女史は我女子教育界の寒梅にして、女子が如何に堅信熱愛にして、若かも貞節賢德なる婦人たりし乎、請ふ此書を一讀其爲人を知り玉へ、

巖本善治君著

教育主義

吾黨の女子教育

實價金八錢　郵税金二錢

此書は通篇、拾五章に分ち、紙數二百〇七頁、記載する處

我國女子教育に關する編者が積年幾多の意見と、其主義を代言するものにして、殊に明治女學校の教育精神、期圖を知らんと欲する士女は本書に就き閲讀あらんことを、

巖本善治君講述

女子教育

教育學講義

實價金八錢　郵税金貳錢

此書は君が、明治女學校高等科女生に口述せられたる講義中を要望者に頒たん爲めに廉價を以て發行す、

竹越竹代女史著

賢婦傳記

婦人立志篇

實價金貳拾錢　郵税金貳錢

見よ婦人の地位の如何に制せられて、其達し得る程度を如何に限られて、而して其達し得る程度の制限なきを、此書は女子の讀物として甚だ有益なるものにして、頒く之を世間に紹介す

船越鼎太郎君著

產婦小供

攝生法

實價金十錢　郵税金二錢

此書は妊娠婦人適當なる攝生法を、平易、簡便に示したるものにして、產婦必讀の書なり、

橫山雅男君著

實跡統計

婚姻論

實價金拾六錢　郵税金四錢

此書は理論を以て是非を極論したる者に非ずして、著者は統計集誌に於て知名の人なり、專ら古今東西の比例統計を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

採り以て、其國の寒暖生活文化の高低に因て、結婚に早晩あるよ、其實例照々乎として頗る我國男女の風習に付警嬌せしものなり、

博愛慈善

看護婦美談

久野久香君著

實價金廿五錢
郵税金六　錢

博愛なる婦人の多涙一生を捧げて看護婦となる、而して記述の事柄二百數十頁を以て成る、

撰正百首

修正小倉百首

蔦廼舍主人

實價金　四　錢
郵税金　二　錢

我國婦女の毎春弄牌小倉式紙など弄じ之れを暗記成誦す、所謂戀歌なるもの殆ど其半に居る、其甚だしきものに至りては猥褻汙穢に過ぎたり、撰者は烏保不爲在原業平小野小町一流の人物を深く慨して此撰を世に公にせられたるものなり、此撰は伊藤仁齋好詠の和歌にして、其集二百八十有餘集にして一の戀歌なし、仁齋是を　天皇に奉りたるものなりと云ふ。

女子消息

文のかきふり

小野鷲堂先生書

上下二册
實價金三拾六錢
郵税金六　錢

女子の書牘は、おのづから其かきぶり存するなると、近來玆に注意する人々稀にして、眞字がちにこちく\しき漢語をまじえ、おのこどもの書きなすものと、別ちなきやうに見ゆるそうたてき。そもく\文は、その書きふりうるはしければ、なんとなうゆかしく覺ゆるものなるを、女子にふさはしからぬ、とげく\しき文字の流行すなれば、いかてと思ひたちて、連綿墨つぎの法を考え『御候』字などのおき

同

所をたゞし、熟語を除くほかに、多く假字文字を用ゐたり。云々編者誌す

高等

女子文かきふり

同

實價金三拾二錢
郵税金六　錢

この書も亦女子が書翰のかきぶり、八拾壹題百四拾一章をつらねたる女子手跡の摸範とすべきものなり。

再校

かな習字帖

同

三册
實價各金拾錢宛
郵税各金二錢宛

此の書は、各女學校の習學科に撰定せられ、高等中學二年以上に相當する行、草躰の習字帖なり、自修の稽古本に適當のものなり。

藝妾內幕

藝者と手掛

炭谷小悔女史著

實價　金　三　錢
郵税　金　二　錢

此書は炭谷小梅女史か、藝者と手掛の內幕を遺憾なく披露せられたるものにして、市下諸新聞は之を轉載或は細評せられたるものなり。

貞節龜鑑

貞婦お石

櫻井成明君著

實價　金　壹　錢
郵税　金　貳　錢

貞婦お石が實に婦人の龜鑑たるべき貧困の中に舅姑の病氣を看護し、不良の夫が亡命して行方知られすなりたる后は、備中に田を鋤き畑を耕し、其苦節言語に堪ゆ。

鈴木弘恭大人講述（附錄小倉てびき）
櫻痴居士福地源一郎作

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

鈴木弘恭大人講述

（附錄小倉てびき）

第五版 百人一首講義

正價金廿八錢　郵税六錢

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第四版品切に成りたれば玆に第五版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ〴〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すとを得て至極重寶なり。

鈴木弘恭大人述

國文抄錄 文話

全　實價金十七錢　郵税金四錢

鈴木弘恭先生編
多田親愛先生書

女子消息 ゆきかひぶり

全　實價金廿五錢　郵税金四錢

本邦女子の用文は或は高尚に過ぎ或は舊習に泥して甚煩はしきは當局者の常に憂ふる處なり著者夙に此に注目するありて今度此文を著するとゝなれり文意は固より簡易を旨とし都鄙通して行れ易き文躰を用ゐ四季雜部等の題數合せて百五十餘章尋常初學生より高等科女學生に適するやう勗めて秩序を失はす詞辭正しく綴られたれは婦女子必要の龜鑑なり

賣捌所　東京神田表神保町六番地　女學雜誌社書店

櫻痴居士福地源一郎作

葵の御紋

全一冊　大判　美本百七十五頁　正價金廿五錢　郵税金四錢

名さへ床しい葵の御紋いとゞ昔を戀しがらせて櫻痴先生が筆のすさび。そのよしあしは言はずもあれ、三葉葵の紋ちらし、見事に製本も出來ましたれば、何卒御愛讀下さる樣、いづれも樣へ願上升

銀婚の大典

極大形全一冊　正價十八錢　郵税四錢

一葉庵主人新著　歷史小說

勘氣由左衛門

全一冊大判美本　定價金十五錢　郵税四錢

葛西ヶ谷一片の白露が北條九代雄圖のなごり、浪を峰の松に殘して墓なく消えた勘氣由左衛門、二度こゝに生れ出たり。乞ふ一本を購はれて、歷史小說の眞味の程を味はひ玉へよ。

哲學博士リー君新著〇高橋五郎譯

新日本の花嫁

全一冊洋裝美本　百三十頁　正價十二錢　郵税四錢

人生哲學

全一冊大形三百頁　洋裝美本　正價八十錢　郵税十錢

發兌　東京築地二丁目二十二番地　書肆　一二三館

賣捌所　女學雜誌社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

御おしろいたし元祖

純良麝香入新發明ねぢ口輕便器物入なるを以て貴婦人に必要の品なり

ねぢ口みて奇妙の入れ物あり

貴婦人方にも御弁利の品あり

東京馬喰町一丁目(電話六五二番)

有名賣藥化粧品類問屋宮内省御用達

岳陽堂 平尾賛平

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵税共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊(半ヶ年分)	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊(一ヶ年分)	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

一本誌購讀者は代價郵税共凡て前金御拂込之事前金御拂込無之御注文有之候共一切送附不仕候

一本誌代價郵税共郵便小爲替にて拂渡局を必らず

一ッ橋郵便爲替取扱所へ宛御振込の事。

誌取人は神田表神保町六番地女學雜誌社と御記入の事。郵便切手代用は一割増(五厘切手に限る)にて申受け候。

一本誌御注文の節は住所姓名を明瞭に記載し號數は何號より何冊分と詳細に御書添への事。

東京市神田區表神保町六番地

發賣所 女學雜誌社書店

明治廿六年四月廿五日内務省許可
明治廿七年二月廿三日印刷
明治廿七年二月廿四日發行

東京市麴町區下六番町六番地
發行兼編輯者 巖本善治

牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地
印刷者 根岸高光

東京北豊島郡王子村下十條八百五十一番地
發行所 女學雜誌社

牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場(電話十九番)